

タイトル	現代美術入門・〇〇〇になろう			
学校名	千葉県立富里高等学校	美術	氏名	金澤安宏
教材費	約2,000円		実施時間数	1～8時間

1. ねらい

鑑賞の授業において、芸術家を紹介する場合、鑑賞のみで生徒の興味・関心を引き寄せることが困難な場合がある。それで、芸術家を紹介した後、その手法を实践させることで、その芸術家への理解・興味・関心が深まると考えた。鑑賞と制作を融合させたいと思って考えたのが、この課題である。美術の概念くずしと概念拡大も目指している。

2. 材料

A3画用紙数枚、ジャケット判パネル、鉛筆、アクリル絵の具、A3ファイル、段ボール、木箱など

3. 展開

様々の芸術家の生涯や手法を紹介しながら、その芸術家の手法を实践させる。

「ピカソになろう＝ピカソになったつもりで自由に顔を描いてみよう」（2時間）

A3画用紙に、自由に「顔」を描かせる。描画材は何を使用しても良い。鉛筆だけでも良いし、サインペンでも良いし、もちろん絵の具で着色しても良い。「今まで誰も描いたことが無い様な描き方で描いてみよう」と呼びかける。どんどん描く生徒もいれば、とまどって手が止まってしまう生徒もいる。授業の最後に、ピカソが描いた様々の「顔」の資料を配布する。生徒は驚くようである。「自由」とは実は大変なのだということを伝えたい。

「モンドリアンになろう＝モンドリアンになったつもりで構成的絵画を描いてみよう」（7時間）

10パターンくらい鉛筆で下描きを描かせる。その中から、3パターンくらい選ばせて着色させる。そして最も良いものを、ジャケット判パネルに描かせる。ジャケット判パネルにはジェッソで地塗りをしておく。アクリル絵の具で着色。マスキングテープを使いたい生徒には使わせる。3原色以外の色も使用しても良いことにしている。生徒の様子を見ていると、互いに「〇〇ちゃんのは構成が良い」とか「〇〇ちゃんのはバランスが悪い」などと言い出すので、面白い。

「デュシャンになろう＝デュシャンになったつもりでオブジェを創ってみよう」（1時間）

様々の既製品を用意しておく。それらの物を2つ以上組み合わせてオブジェを創らせる。組み合わせる制作の前に、次の様な指示をする。「2つ以上の物を組み合わせること」「物を日常とは違った組み合わせにすること」「組み合わせてその物から本来の用途を奪うこと」「見られるためだけに存在する物にすること」そうすると、「それは、アートになるだろう」と言って、制作させる。生徒はけっこうノリノリで制作する。

それを写真撮影し、その写真で評価する。授業終了前、そのオブジェは解体させる。



「イブ・クラインになろう＝イブ・クラインになったつもりでモノクローム絵画を描いてみよう」

1枚目は、画用紙に自分が最も好きな色でモノクローム絵画を描かせる。2枚目は、画用紙に自分がイメージする空の色でモノクローム絵画を描かせる。3枚目は、手に絵の具を塗りそれを画用紙に押し当てさせる。画用紙はA3サイズ。(2時間)

「日比野克彦になろう＝日比野克彦になったつもりで段ボールアートを創ってみよう」(5時間)

段ボールや画用紙でオブジェを創らせる。帽子や靴など創るものは自由。着色させる。また、表面に千代紙や英字新聞などを貼らせても面白い。接着はマスキングテープや木工ボンド。



「高松次郎になろう＝高松次郎になったつもりで影の絵画を描いてみよう」(3時間)

写真を基にして、ジャケット判パネルに影の絵画を描かせる。影を撮影した写真を各自持って来るように前の週に指示しておくが、数枚こちらでも準備しておく。ジャケット判パネルには、ジェットンで地塗りをしておく。アクリル絵の具のニュートラルグレーで着色。

「コーネルになろう＝コーネルになったつもりでBOX ARTを創ろう」(8時間)

BOX ARTを創らせる。テーマは自由。中に封入する素材は各自で用意させる。箱は新日本造形の「杉材コラージュボックス70」を使用している。

それぞれの制作時間は一応の目安であり、生徒の状況に応じて変えている。

4. 指導上の留意点

実践させる芸術家を慎重に選ぶ。様々な傾向の芸術家を選びたいが、選ぶ基準としては、以下のようなことを考えている。

- ① 生徒でも実践可能な手法であること。
- ② 生徒が興味・関心を抱きそうな手法であること。
- ③ 美術の面白さ、楽しさを味わえそうな手法であること。
- ④ 生徒の美術概念を拡大させるような手法であること。
- ⑤ 美術史の中で、また、生徒にとっても、意義のある手法であること。

また、制作させる際の留意点としては、以下のようなことを考えている。

- ① その手法に縛り付けないこと。例えばモンドリアンを実践させる際、「緑色を使いたい」と生徒が言ったら、使わせてもかまわない。
- ② 最後に必ず感想を記入し、提出させる。

5. 資料・参考文献

プリント、画集、展覧会図録など、参考資料は出来るだけ多く準備しておいて、制作前に図版を見せ、制作後にも見せる。制作前と制作後で見方が若干変化するようである。

金澤作成のプリントを欲しい先生には、連絡をいただければ、お渡します。